

# 陳述書

原告 二宮 美日  
(鬼北町)

わたしは、鬼北町でエゴマを栽培し、えごま油を製造・販売する企業組合森の風の代表理事をしております。また、創業八十七年の和菓子屋も細々やっております。原発いらんぜ宇和島市民の会の幹事もしております。企業組合を起こしたのは、少子高齢化で農業離れが進み、耕作放棄地が増えたため、それを何とかしたいという思いからです。さらに言えば、伊方原発が事故になり、放射能汚染された場合も、油には放射能が入らないと聞いていたので、万一の時にも栽培できる作物だとも思ったからです。

鬼北町は、伊方原発周辺から風船を飛ばすと、風船がやってくる地域です。伊方原発からは五十キロ以上離れていますが、偏西風の吹く冬場は特に風下になります。冬は雪も降ります。これらは、福島県における飯館村と同じ条件です。鬼北町は、原発事故が起こった時、避難者を受け入れる地域になっていますが、飯館村に避難した人々と同じように、余計に被曝する危険性が高い地域であります。

鬼北町は最後の清流といわれる四万十川の愛媛県側唯一の源流地域です。わたしの住んでいる小松部落では、去年はコロナウイルス感染症の影響で営業が中止になりましたが、通常なら毎年六月の最終日曜日から八月いっぱい、鍾乳洞から湧き出る水を利用して『安森洞そうめん流し』が行われます。今年で創業四十一年になります。これはわたしの父や小松部落の人たちが、仕事の合間に知恵や資材を持ち寄り、地域の活性化を願って無償で鍾乳洞を掘り広げ、建物を建てて始めたものです。創業四十一年ともなれば、父をはじめ最初に始めた人たちは、多く亡くなり、年老いて、会員は減り、わたしのような二代目もそう多くはありません。それでもわたしは、父や地域の人たちの努力や思いを知っています。ずっとこの地に住み続けて、父や地域の人たちの思いを引き継いでいきたいと思っています。

またわたしは今、地元の三島神社の総代をやっていて、去年の正月に、戦後途絶えていた浦安の舞を隣の日吉神社の神主さんに教えてもらい復活させました。去年の秋祭り今年も正月にも奉納しました。わたしの住む地域には、そこだけの自然があり、人々の暮らしや思いがあり、歴史や文化があります。

ですが、伊方原発が福島第一原発のように事故を起こし、放射能が広がり、鬼北町が愛媛県の飯館村になれば、わたしたちは地域を離れないといけなくなります。地域の土地や水が汚染されたら、農林業をはじめこの地で生活することはできません。この地域の人々の思いも歴史も文化も消えてしまいます。誰がその補償をしてくれるのでしょうか。電力会社も愛媛県も国も補償などできないはずで、誰も責任が取れません。責任が取れない事はしないのが大人の条件、大人の態度です。電力会社も愛媛県も国も大人の対応をして頂きたいと思えます。

わたしが原発問題に関心を持ったのは、今から約15年前、以前住んでいた高知県東津野村、今の津野町になりますが、そこが高レベル放射性廃棄物最終処分場の文献調査に手を上げ、東津野村に住む友人たちが、その反対運動を始めたためです。何も知らずに反対はできませんので、その時徹底的に原発や放射性廃棄物について、また原発が誘致された歴史などを勉強しました。

裁判所にもお出ししていますので裁判官の皆様も、故齋間満さんが書かれた『原発の来た町 原発はこうして建てられた 伊方原発の30年』（甲第1号証）という本を読まれたと思います。わたしはその本が、とても衝撃的でした。そこには、伊方原発誘致に関する歴史が克明に書かれています。また当時の報道や警察の問題点も指摘されていました。

伊方原発が誘致・建設されたのは、わたしが小学生から中学生の頃ですが、テレビに映る反対運動の様子は子どもには過激に見えて、環境問題に関心が高かったわたしが、長く原発問題には関わらなかった原因となりました。齋間さんの本を読んで、それは電力側・県や国側から映した映像だったからだと気づきました。そちらから見ると、反対派は暴徒のように見えました。裁判官の皆様はよくご存じと思いますが、同じ物、同じ事象でも、見る立ち位置や状況によって、違ったものに見えます。テレビが暴徒のように映した原発建設反対の人たちは、地域の海を愛し、未来を思って戦っていた、権力に虐げられた人たちだったのです。

他にも各地の原発誘致に関する資料を読む中で思ったのが、この問題は、環境問題と共に人権問題だという事です。また一般的にエネルギー問題とされていますが、それよりも原発は政治問題の色合いが強いと気づきました。過去の原発裁判を見ていても、科学的知見が前面に出て争われているように見えますが、世論や政治力と無関係ではないと感じます。原発誘致の歴史を見てみても、金や利権によって地域が分断され、多くの人権侵害が見られます。これは、軍事基地の誘致建設においても見られることで、どういう手段を使うかで、その本質がわかります。原発と軍事基地は同じだとわたしは思います。今国が原発を止めないのは、潜在的核開発能力を保持しておきたいからだという話が出ています。

わたしは日本が核兵器を持つべきだとは決して思いませんが、逆説的な言い方をすれば、原発を持つよりも、核兵器施設を持つ方がまだましだと思います。核兵器施設なら、放射能防御もセキュリティももっと厳重なはずです。先日、伊方原発の敷地内にイノシシが入って走り回っていましたが、イノシシが入れるのなら、テロリストは容易に入れるでしょう。セキュリティの脆弱さは、明らかです。そして地方の過疎地に住むわたしが一番腹立たしいのが、原発がエネルギー問題と言うのなら、最も電力を大量に消費する都市部や工業地帯にどうして建てないのかという事です。危険だから、もしもの時に人的被害の少ない過疎地に建設したのは、今や誰もが知ることです。原発を誘致した地域は、金や自分たちの生活の為に、自分たちの安全を売ったわけです。今は自分たちだけでなく、周辺自治体の安全も抵当に入れているようなものです。ですがその事で原発立地町村を責めているわけでも、原発立地町村と対立するつもりもありません。

同じ過疎地の人間として、そうせざるを得なかった人々の気持ちもわかります。原発を誘致・建設した人たちが悪人だったわけでもありません。誘致当時はそれが国の方針であり、誘致した人たちの多くが、それが良い事であり、地域の人たちや、未来の為だと思ったのでしょう。ですが物事の本質は、掲げられた理想や目先の利益にあるものではありません。それがどういう手段によってなされたのか、ということです。

人々の人権を踏みにじって行われたことは、いくら美辞麗句で飾っても、人権侵害しか生み出さないものです。原発が本当に人々にとって良いものであるなら、金や利権にものをいわせ、人々を分断させて建設されたりしません。万が一事故を起こしても、人々をこれほど不安にさせ、悲しませ、このような裁判をすることもないでしょう。

原発の過疎地誘致は、過疎地切り捨て政策だとわたしは思います。初めから切り捨てるつもりで、過疎地に建てたのですから、事故が起こっても見捨てられて当然です。福島第一原発事故後の国や電力会社の対応を見ていると、被災地の人々に寄り添い、その地域の事を第一に思って対応しているとは決して思えません。過疎地の人間は、日本国民ではないのでしょうか？

日本における三種の神器は、勾玉と鏡と剣ですが、これは日本の為政者の条件を象徴的に表したものとされています。勾玉は胎児の形を現したもので、命の象徴です。物事を中心、一番大切にすることは命だという事です。鏡は物事や状況を、ありのまま映すという事で、洞察力や分析力を現しています。鏡を欲や思い込みや偏見でくもらせては、正しい洞察力や分析力は得られないとも言われます。剣とは、立て分けると言う意味で、判断し、決断し、行動するという事です。もし間違った判断や決断、行動をした場合、責任を取る。切腹するという覚悟も含まれるのではないかとわたしは思います。

古において、裁判をするのは、為政者の務めでした。それはとても大変なことで、その判断で多くの人々の運命が決まります。大変な重責だと思います。裁判官の皆様には、どうぞ『命』を基準に、曇りなき目で洞察・分析していただき、日本の歴史に耐えうる判決を出していただきますよう切にお願いして、わたしの意見陳述を終わります。

ご清聴ありがとうございました。